時枝さんのことども

土井忠生

時枝誠記さんについて、わたくしは知るところがまことに少ない。たまたまおたがいが十九世紀の最後の年、一九〇〇年すなわち明治三十三年の生まれで、国語学の方面に進んだという縁故から、一種言い知れぬ親近さが持たれるので、あえて時枝さんと呼ばせていただく。しかし、これから述べるように、多くの点で対照的な違いがあるので、わたくしは時枝さんを真に理解するに至っていないことをお断りしておかねばならない。

わたくしのおぼろな記憶に残るところによれば、始めて時枝さんのことを聞いたのは、昭和の初めロンドンに留学中のことであったかと思う。京城大学からは何人か欧州に見えていて、ロンドンでは、大英博物館で顔を合わせるだけでなく、一

緒に古本屋廻りをしたり観劇に案内していただいたりした方々もあった。多分それらの方から何かの機会にお聞きしたのでもあろうか。時枝さんはパリで、ある個人—あるいは大学教授のような人であったかも知れない—の家庭に入って、ダンスも習いながら、フランスの生活に親しんでいられるということであった。それを聞いて、わたくしはうらやましくも思った。安下宿住まいをして図書館通いをするのが関の山のわたくしなどには、とても真似のできないことなのである。その後パリにしばらく滞在した折にも、わたくしは、エリセーフさんが館長をしていられたサツマ会館に厄介になって、フランス人の生活にふれることからは遠ざかった。また、ハンブルグ大学でフロレンツ教授の日本学教室に出入していたころのことだが、横浜で貿易商を営み関東大震災に妻君を亡くしたドイツ人が、老後の慰みにこの教室の聴講生となっていた。その人がわたくしを一日歴史学教室の親睦会に誘い出した。夜に郊外の山小屋でダンスパーティが開かれて、教授たちも若い女子学生と組んで相楽しむ光景が展開された。平素はほとんど関係を持たない女子学生までがこの会合のためにつめかけたから、対手がなくて手持ぶさたの女子学生もたくさんいるので、わたくしなどにも好奇心から声をかけられたらどうしようかと、びくびくしていた。幸にも中世史の権威クロイトゲン教授老夫妻も来ておられ、その夫人は英国人で、日本の舞踊の讃美者でもあって、その御夫妻の話対手となり、豊富な話題は尽きるところがなかったので、ダンスを全く知らない恥をさらさなくてその夜はすんだ。このような経験しか持たないわたくしから見れば、時枝さんはとてもえらい人だということが、先ず強く印象づけられた。時枝さんのパリ生活の全体については知らず、偶然に耳にした噂話の真偽のほども保証の限りでないが少なくともそのような観方が同僚の人々からはなされる一面をお持ちになっていたことには間違いなかろう。国語学に志す者が若くして在外研究の生活を送るのにも、小さく自分の領域を限って、その中にとじこもること以外には何も考えず、それから一歩も出ようとしない、意欲に欠けたわたくしなどに比べて、時枝さんが恵まれた才能とあふれるエネルギーを持ち、積極的に機会をとらえては、それを存分に活用しつつ、新しい道を開き進んでいかれる雄々しさに驚嘆し、頭がさがるばかりであった。その気持は一生を通じて変らなかった。

時枝さんに最初にお目にかかったのが何時どこであったかは覚えていない。京城時代の時枝さんと直接お話することは一度もなかったのであろう。わたくしの頭に浮んでくるのは、昭和十九年に国語学会結成の準備が進んで、その趣意書の最後の打合せが橋本進吉先生のお宅で行なわれた折のことである。方言学会を発展的に解消して国語学会の成立に力を貸された東条操さんと東大教授としての時枝さんとの外に、運よく何かの要件で上京していたわたしが地方在住者の代表ということ

で、その席に加えられた。橋本先生の手許でまとめられた文案を中心に相談がなされた。どういう内容の文句に関してのことであったかは忘れたけれども、君の学説からすれば、ここはどういうように言った方がよいのか、という意味のことを、橋本先生から問いかけられたのに対して、時枝さんはただにこにこしていて、別に発言はなさらなかったと覚えている。橋本先生の時枝さんに対する御心づかいなり御期待なりの一端がうかがい知られて、その場面の様子はきわめてはっきりとわたくしの脳裡に焼きつけられた。

終戦後、国語学会の活動が始まってからは、学会の運営が時枝さんを中心としてなされ、そのお力に待つところが大きかったことは衆知のとおりである。国語学会も始めは、会員の研究発表を主体とすることにはならないで、講演中心の方式がとられて、わたくしなどもその一役をおおせつかることがあった。わたくしなどを田舎から引張り出すところに、時枝さんが管理運営にすぐれた手腕を持っていられた一面がうかがえるのである。わざわざ指名でもされない限り、特別の事情がなければ、中央の学会などに顔出しをしないのが、地方人のペースを守りたいわたくしの意地で、その方針を守ってきたのでその後も国語学会の会合で時枝さんと話合うことはほとんどなかった。ましてその外に個人的に相接する機会は全くないままで終った。

東大で国語学会が開かれた後のこと、学会の評議員会とでもいうのであったろうか、国語研究室の時枝さんのお部屋に集まって、酒の振舞を受けた。時枝さんは信州にご家族の方を疎開させて不自由な生活をなさっておられ、物資も手に入りかねる折にもかかわらず、当時助手を勤めていられた大野晋さんの一方ならぬ奔走によって用意された貴重な酒だと聞かされた。折角ながら酒に弱いわたくしは、その御厚意を十分に受けることもできなかった。それにしても、時枝さんと同席で酒を口にしたことは、この時のこと以外には思い浮かばないのである。あったとしても、それは多人数の公めいた場所に限られて、思い出の種にはなっていない。真実の時枝さんは、酒を満足に召しあがった時に接して始めてわかるとは、よく人から聞かされた。不幸にしてそういう機会を持ち得なかったわたくしは、時枝さんを語る資格がないと言えそうである。遠目に霞をへだててしか見ていないわたくしは、時枝さんの一面を、しかも部分的にしかとらえていないことになるので、この一文を草するのにも、筆の運びが重くにぶりがちである。

時枝さんは、学者として独自の境地を開かれた。日本人自身の国語研究をあとづけて、国語学史をまとめられるのにも、日本人の言語観の中心点を追求して、その特質を鈴木朗に見出された。その時枝さんが名古屋における鈴木朗の記念講演会

でなさった学術講演を以て、学者としての御活動の幕を閉じられたことは意義が深い。最初の出発点を的確につかまれた学者の一生を全うされるのに、まことにふさわしく、当然の結果だったとも言えよう。先人の研究から学びとられた日本的言語観を、自己の立場において押進めて言語過程説を樹立されたが、その立場を堅持して学説の発展に一生をかけられた、そのねばり強さには驚くのほかない。それは持ち前の精力的な真面目を遺憾なく発揮されたものであって、しかも研究の本道から外れることのないように、常に本格的な問題と真剣に取組んで、それを徹底的に解決する意志の強さによる。これこそ他人の追随を許さないところである。理論の構成にあたって、先ず事実の把握をきわめて重視し、常に自ら実行されたことも注目に価する。古典の用語に対しても透徹した観察を加え、その一つ一つを理論への発展の基礎として積み重ねていかれた。古典解釈の究極の眼目は、形容詞連用形の用法が中止法か副詞法かを見定めることにあるとの見解は、全く動かすべからざる至言として、古典理解の奥殿に入る秘鍵を授けられたものである。問題の中核を明確に把握する能力のすばらしさがここにうかがわれる。言語の本質を言語主体の側に求められた時枝さんの立場からは当然のことながら、国語教育なり国語問題なりにも、勇気をもってそれぞれの方面に巨歩を進められた。スケールの広い活動のどの面をとってみても、首尾一貫した態度で信念に徹した活躍をなさった勇姿は実にあざやかなものがあった。

理論的学説や主義主張のこととなると、立場の相違から、批判や反対が出てくるのが、むしろ自然のことであって、時枝さんの場合もその例外ではなかった。しかし、時枝さん自身は面と向かっての批難めいた言説に対しても、泰然自若として動ずることなく、ほとんど意にも介されなかったそうである。それは単なる寛容という段階のものではなく、人物の大きさを物語るものに外ならない。その由って来るところは、時枝さんが剣道の達人であったことに帰するようである。時枝さんの在学された岡山の六高は柔剣道が強いのでも知られていた。わたくしの知っている範囲でも、戸田清氏（広島大学名誉教授）が時枝さんと同期の柔道の主将であったと聞くが、その態度から性格まで共通点があると感じられる。その上級には、わたくしの中学時代の同級生永野重雄君（富士製鉄社長）が柔道で鳴らしていた。柔剣道に関係されたかどうかは知らないけれども、時枝さんの文科系同期生の一人、故岸本英夫氏もわたくしの畏敬する方である。岸本氏は不治の病と日々をたたかいながら、東大図書館長として大学図書館の新しい在り方に熱意を傾倒して、その方面で指導的役割を果されたのであった。すべて犯し難い気慨の持ち主という点で、六高魂を身につけた方々のように思われる。確かに岡山における高校生活は若き日の時枝さんを鍛えて、一生を支えるバックボーンを造りあげるのに大いに役立ったに違いない。

東大教授としての時枝さんの評価は、見方によってニュアンスの違いもあり、必ずしも一様でないかも知れない。一体、東大はわが国のすべての大学を代表する特別の地位にあり、それゆえに国家的ないしは社会的責任を課せられているところである。従って、東大教授は他の大学に属する者よりはいろいろな面において一段と重い使命を帯びている。そういう意味において、時枝さんは東大教授の責任を全うされた方だと、わたくしは信じている。

橋本進吉先生は、学問の限界を明確に見究め、厳しさに徹することによって、国語学に確乎たる基礎を築かれたお方である。中央地方を問わず、学問の世界の純粋なものを追究してやまれなかった橋本先生の眼から見れば、一地方で地方なりに可能な方法と程度で物を考え、その範囲でしか何も出来ないわたくしどもは、学究に価しない者であったろう。京都大学の、最も特色ある地方大学に学び、地方における学徒の生き方を考えて時を過したわたくしは、やはり気のきかない田舎者なのだということを、橋本先生によって痛切に思い知らされた。その点で、橋本先生は学問の上からも人間修業の上からも、わたくしどもの厳師である。

時枝さんは不動の信念と何人にも屈しない主体性とを内に蔵しながら、学問の理論と実際にわたり、広い範囲の活動を展開され、その全分野において、清濁併せ呑むという寛大さを以て、大所高所からの指導的役割を遂行してこられた。このことは地方在住者が地域性を存分に生かした行き方をすることを認め、それを励まして下さる結果ともなって、わたくしどもには有難いことであった。そして、あらゆる方面でその足もとにもよりつけない大人物と仰ぎながら、何かしら親しみを感ぜずにはいられないゆえんでもあった。あるいは、もし時枝さんに聞いてみたら、それは友情だよとおっしゃるのではないかとさえ思いあがった気持にさそいこんで下さるあたたかさが、わたくしの身辺にただよっているようで、わたくしは時枝さんに心から感謝の念をささげずにはいられない。

――広島女子大学学長――